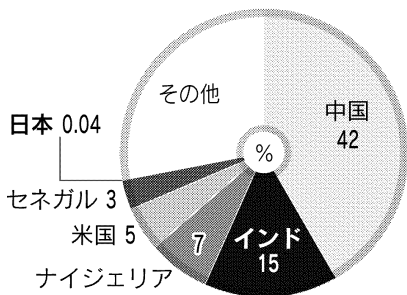


落花生のさや使い板成型

日大、インド産に応用

日本大学生産工学部（千葉県習志野市）はインド工科大学とインド産の落花生のさやを使った板の共同開発を始める。千葉県産の落花生で培った技術をもとにインド産の特徴にあつた成型技術を2014年3月をメドに確立する。インドは世界2位の落花生の生産量を誇るが、さやはこれまで捨てていた。さやの再利用法を確立、資源の有効活用につなげる。

インドの落花生生産量は世界2位



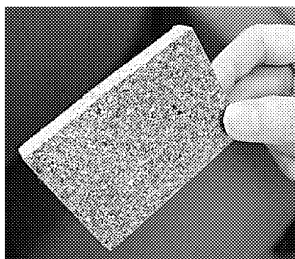
(注)2010年、国連食糧農業機関調べ

世界生産量2位、地元大と連携

ゴミを有効資源に

日大学生産工学部は千葉県産落花生を共同で県産落花生を使って成型技術を開発、特許も出願した。0.5〜1.4ミリの大きさに細かく砕いた落花

生をのさやに接着剤と水を混ぜ、熱と圧力を加えてつくる。できた板はさやと接着剤の比率がおおよそ4対1になる。住宅廃材などを主原料とするパーティクルボードの日本工業規格（JIS）を満たした。規格家具や建材として利用できる。



県産落花生でつくった板はJIS規格を満たした

力月間受け入れるほか、日大からも研究員1人を送り込む。インド産のさやに合った接着剤と水の混合比や成型時の温度や圧力を調べる。インドから取り寄せたさやを使った実験では「国産よりも高い強度が得られた」（高橋進教授）。国の研究資金を活用し2年間で最適な条件を探り当てる。

国連食糧農業機関によると、10年の落花生の生産量は世界全体で3767万ト。中国が42%を占め、インドは15%で世界2位の生産量を誇る。落花生の重量の約4分の1がさやに当たるといわれるが「現状はゴミとして処分するしかない」（高橋教授）。国内で培った技術を生産できないから大量生産する技術も確立する必要がある。現在は金型のある30センチ四方までしか生産できないから、日本は国内企業と共同で専用の大型成型機の開発も始める考えだ。

に活用し、資源の有効活用につなげる。

日本のさやで作った板も含め、実用化には成型技術と並行して規格品を大量生産する技術も確立する必要がある。現在は金型のある30センチ四方までしか生産できないから、日本は国内企業と共同で専用の大型成型機の開発も始める考えだ。